研究紹介

東京大学総合研究博物館アンデス調査のいま昔

金崎由布子

当博物館には、東京大学アンデス調査団による、ペルー共和国を中心とした中央アンデス地帯の古代文化に関する調査資料が保管されています。東京大学による古代アンデスの調査は、1960年代に本格的に開始されました。最初の発掘調査地となったワヌコ市コトシュ遺跡（図1）では、「交差した手の神殿」など多数の神殿が発見され、先土器時代にすでに神殿が造られはじめていたことを、アンデスで初めて明らかにしました。また、ワヌコ市はアンデス地域の中でも東斜面側にあり、「アマゾンの眉毛」と呼ばれる森林地帯の端に位置しています。コトシュ遺跡では、先土器時代の層位のすぐ上に、熱帯色豊かな土器を持つ文化が見つかり、この地域ではかなり早い時期からアマゾンとの交流関係があったことが明らかになりました。

この調査の成果は、現地で大きな反響を呼び、現在コトシュ遺跡はワヌコ市の観光名所の一つとなっています。「交差した手」のモチーフは、街のいたるところに見られ、記念硬貨も発行されました。また、市内にはコトシュ遺跡の発掘の隊長であった泉靖一先生の名前を冠した、「セイイチ・イスミ通り」という通りもつくられています。その一方で、1960年代以降、政情不安などから日本人研究者によるワヌコ市の調査は長らく中断してしまいました。

それから半世紀経った2016年、本館助教であった鶴見英成先生により、コトシュ遺跡の再発掘調査が開始されました。このときチーム唯一の学生として調査に加えていただいたのが、当時修士学生だった私でした。このプロジェクトには、1960年代のコトシュ遺跡の調査に実際に参加されていた、大貫良夫先生（東京大学名誉教授）や、藤井龍彦先生（国立民族学博物館名誉教授）が参加され、また総合研究博物館年代測定室の大森貴之さんも加わっていました。調査は2018年まで続き、ワヌコ盆地の紀元前の神殿文化の詳細な編年が確立されるなど、様々な成果がありました。

2019年、私はこの調査を引き継ぎ、新たな考古学プロジェクトを開始しました。私の研究関心は、アンデスとアマゾンの境界という特異な環境にあるこの地域が、アンデス文明の独自の特徴の形成にどのように寄与したのかということにありました。そのためまず、ワヌコ盆地の内部で、2018年までの出土資料の分析を行うとともに、これまで調査が行われていなかった形成期の神殿遺跡の一つを発掘しました。これらの調査では、この地域にアマゾンとの交流が活発化したタイミングが明らかになり、この地域が紀元前二千年紀の後半には、アンデス・アマゾン両地域の交流の要衝として機能していたことが実証されました。

現在私は、ワヌコ市のさらに東、アンデスからアマゾンへと移り変わるその入口のところまで調査地域を広げて研究を行なっています。2022年夏には、3年ぶりに現地で発掘調査を行うことが出来ました。この地域は、常時発生する濃い霧によって育まれた森林に覆われ、山地側に比べて遺跡の発見が難しい地域です。そのため、半世紀以上新たな遺跡が報告されていませんでしたが、今回の調査では、紀元前一千年紀、アンデス文明形成期の後期にさかのぼる複数の神殿遺跡の存在が確認されました。

その中の中心的な神殿であるチャウピヤク遺跡の発掘調査（図2、3）では、アンデスの「山の文化」とアマゾンの「森

図1　コトシュ遺跡.

図２　チャウピヤク遺跡建築.

図３　チャウピヤク遺跡の発掘風景.

の文化」が合わさったような、独特の文化の姿が明らかになりました。川の合流地点を見下ろす山の尾根につくられたこの遺跡は、ワヌコ市の同時期の遺跡や、山地の有名な遺跡であるチャビン・デ・ワンタル遺跡など、アンデス山中に見られる遺跡とよく似た建築様式を有しています。一方でそこに見られる土器（図４）には、アマゾン低地の影響がはっきりと見られる、独特のスタイルが含まれていました。この発見は、ワヌコ盆地の調査からつづく、アンデスとアマゾンの境界地域の動態という研究テーマの発展に大きく貢献するものです。

1960年、コトシュ遺跡の発掘調査から始まった東京大学の古代アンデス研究は、60年経った今でも途絶えることなく引き継がれています。総合研究博物館に所蔵されている資料は、それぞれの調査当時のなまの記録として、とても重要なものです。今後、この地域でのフィールド調査を進めていくのと同時に、これらの資料の整理や見直しを行い、その遺産を活用していきたいと思います。

（本館助教／アンデス考古学）

図４　チャウピヤク遺跡出土土器.